

各関係機関・団体長 様

愛媛県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について（送付）

このことについて、5月の予察情報を送付します。

病虫害発生予報（5月）

令和 5 年 4 月 28 日
愛 媛 県

1 気象予報（高松地方气象台）

1 か月予報 4 月 20 日発表（4 月 22 日～5 月 21 日）

〈 1 か月の平均気温・降水量・日照時間 〉

	平均気温（1 か月）	降水量（1 か月）	日照時間（1 か月）
四国地方	低 50 並 30 高 20% 低い見込み	少 20 並 40 多 40% 平年並か多い見込み	少 40 並 40 多 20% 平年並か少ない見込み

〈 予報のポイント 〉

- ・向こう 1 か月の気温は、期間のはじめを中心に寒気の影響を受けやすいため低いでしょう。特に期間のはじめは、かなり低くなる見込みです。
- ・気圧の谷や湿った空気の影響を受けやすいため、向こう 1 か月の降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。

2 病虫害の発生予想

麦 類

(1) 赤かび病

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 子のう胞子の飛散調査では、4 月第 2 半旬に西条市で平年より多く推移した。
- (イ) 4 月中下旬に行った裸麦の調査では、発生圃場率は 12.8%（昨年 1.8%）と多い。
- (ウ) 気象予報では、降水量は並か多いとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 乳熟期以降も気温が高く連続した降雨がある場合には、二次感染が起これば発生が増加するため、追加防除を実施する（出穂 25 日後頃まで）。
- (イ) トップジン M 剤の適用登録の使用回数は、大麦では出穂期以降 1 回以内、小麦では出穂期以降 2 回以内となっているため散布に際して注意する。

水 稲

(1) いもち病（育苗～本田初期）

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

- (ア) 現在、育苗期や移植後の早期水稲での発病は確認していない。
- (イ) 気象予報では、降水量は並か多いとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 健全種子を確保するため塩水選と種子消毒を必ず行う。
- (イ) 種子消毒にあたっては、薬剤の効果を発揮させるため、①乳剤以外の長時間浸漬では処理中に薬液を攪拌すること、②処理後は風乾し薬剤を十分付着させること、③浸種後 2～3 日間は水換えしないなど基本事項を遵守する。
- (ウ) 苗いもち対策は、①有効薬剤の播種時処理、②覆土を十分行い播種した籾を露出させない、③育苗中の高温多湿を避ける、④発病の早期発見と薬剤処理による応急防除を実施する。
- (エ) 本田では窒素質肥料の過用は避ける。
- (オ) 育苗場所付近に雨ざらしの稲わらや籾殻を放置しない。
- (カ) 置き苗は、移植後本田での葉いもちの伝染源になるので、圃場内外に放置しない。
- (キ) 常発地や罹病性品種を植え付ける場合には、地域の防除暦に従い、本病に登録のある育苗箱施用剤を必ず処理する。

(2) イネミズゾウムシ

ア 予報の内容 発生時期：やや遅い

イ 予報の根拠

(ア) 現在、成虫の発生及び被害は確認していない。

(イ) 気象予報では、気温は低いとされており、越冬成虫の本田への飛来時期はやや遅いとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 常発地では、本虫に登録のある育苗箱施用剤を処理する。

(イ) 田植え後の深水を避け、浅水管理とする。

(ウ) 本虫に有効な育苗箱施用剤を処理していない圃場で発生量が多い場合には、本田防除を行う。

かんきつ

(1) かいよう病

(令和5年2月28日付け 令和4年度病害虫防除技術情報(第9号)参照)

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

(ア) 伊予柑および甘平で越冬病斑を調査した結果、発生園地率は高い。

(イ) 気象予報では、降水量は並か多いとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 夏秋梢などの罹病枝葉を除去し、病原菌密度を下げる。

(イ) 強風による付傷は発病を助長するので、防風垣や防風ネットなどを整備する。

(ウ) 昨年度の多発園地や発芽前防除の未実施園地では、開花前及び落弁期の薬剤防除を徹底する。

(エ) 本病に対して感受性の高い品種(はれひめ、愛媛果試第28号等)では、防除を徹底する。

(2) そうか病

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 3月の越冬病斑の調査結果は、平年並の発生である。

(イ) 気象予報では、降水量は並か多いとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 発病葉及び枝を除去する。

(イ) 多発園地では落弁期の防除を実施する。

(3) ミカンハダニ

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

(ア) 4月中旬の調査では、平年並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は低い、降水量は並か多いとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 園地内の早期発生樹で1葉当たりの雌成虫数が平均2～3頭に達した場合には防除する。

(イ) 冬期の機械油乳剤を散布していない園地では、発生が早まるので注意する。

(ウ) 薬液は掛けむらのないように丁寧に散布する。

(4) アブラムシ類

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

(ア) 4月中旬の調査では、平年並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は低い、降水量は並か多いとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 幼木や高接ぎ園では発生に注意し、発生初期に防除する。

(イ) ユキヤナギアブラムシの寄生では、葉が内側に巻き薬剤が付着しにくくなるので、丁寧に散布する。

かき

(1) 炭疽病

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 3月の越冬病斑の調査結果では、発生はやや多である。
- (イ) 気象予報では、降水量は並か多いとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 園地内をこまめに観察し、越冬病斑がみられる結果母枝や5月下旬頃からみられる新梢の発病枝を早期に除去する。
- (イ) 昨年、発生が多かった園地では新梢発育期に1～2回防除する。

キウイフルーツ

(1) かいよう病

ア 予報の内容 発生注意

イ 予報の根拠

- (ア) 4月中旬の調査(品種：ヘイワード)では、1樹当たりの樹液漏出数、発病率ともに少ない。
- (イ) 気象予報では、気温は低い、降水量は並か多いとされており、発生にはやや助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 新梢及び花蕾への重要な感染時期であり、特に強風雨により発病は著しく助長されるため、薬剤防除や防風対策を徹底する。
- (イ) 園地見廻りによって、葉の斑点、花蕾の腐敗及び枝幹部からの樹液漏出痕や枝枯れ等の症状が確認された場合、周辺への拡散防止のため、発病部の早期除去を行う。
- (ウ) 伐採は、平成31年3月改訂の「キウイフルーツかいよう病Psa3型の防除方針」に基づき、発病程度に応じて適切に対応する。
- (エ) 開花前の薬剤防除は、ムッシュボルドーDF、コサイド3000等(薬害軽減のため、炭酸カルシウム剤200倍を加用)を使用する。なお、銅水和剤は受粉への影響の恐れがあるため、開花期間中の使用を避ける。
- (オ) 強風雨後、既発生園や発病園地の近くでは、樹体損傷による感染防止のため、抗生物質剤のアグリマイシン-100 1,000倍、カスミン液剤 400倍、アグレプト水和剤 1,000倍、マイシン 20水和剤 1,000倍を応急散布する。

(2) 花腐細菌病

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 気象予報では、降水量は並か多い、日照時間は並か少ないとされており、発生にはやや助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 通風、採光及び排水を良くする。
- (イ) 天候不順が続く場合には、抗生物質剤を開花10～20日前に散布する。

果樹共通

(1) カメムシ類(うめ、もも、キウイフルーツ、なし、すもも、かき、かんきつ等)

ア 予報の内容 発生量：少

イ 予報の根拠

- (ア) 県下40か所で行った広葉樹落葉中のチャバネアオカメムシの越冬密度調査では、全県で越冬量は少なく、越冬確認地点率も低かった。
- (イ) 県下5か所の集合フェロモントラップ調査、県下9か所の予察灯調査でも誘殺数は少なく推移している。

ウ 防除上の注意

- (ア) 今後の発生は、気温の上昇により(平均気温20℃以上)、越冬成虫(7月頃まで生存)は、ヒノキ球果が成熟するまで、サクラ・キリなど餌植物を移動しながら果樹園へ飛来する。
- (イ) もも、なしでは早めに袋掛けを終える。
- (ウ) 果樹園への飛来は、曇天で夜温が高い日に多くなるため飛来に注意を払い、飛来が確認されたら防除を行う。
- (エ) 山林に近い園地での被害が多い傾向にある。越冬密度は低い場合でも、局所的に果樹園への飛来が増加する場合があるので注意する。
- (オ) カメムシ類の防除薬剤の多くは、カイガラムシ類やハダニ類に対してリサージェンス(農薬散布による増殖)が起こりやすいので、散布後のカイガラムシ類やハダニ類の発生に注意する。

野菜

(1) べと病(冬春きゅうり)

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

- (ア) 4月中旬の調査では、促成栽培では並、半促成栽培では発生は確認されていない。
- (イ) 気象予報では、気温は低い、降水量は並か多いとされており、現在の発生傾向が続くとみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) ハウス内の換気に努め、多湿を防ぐ。
- (イ) 草勢の低下は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。
- (ウ) 老化葉はできるだけ除去し、圃場内の通風を図る。伝染源を減少させるため、多発葉を除去する。
- (エ) 発病初期の防除に重点を置き、葉液が葉裏の菌叢までかかるよう丁寧に散布する。また、病勢が進展している場合は、治療効果の高い薬剤を散布する。

(2) 褐斑病（冬春きゅうり）

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

- (ア) 4月中旬の調査では、促成栽培及び半促成栽培ともに発生は認められていない。
- (イ) 気象予報では、気温は低い、降水量は並か多いとされており、現在の発生傾向が続くとみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) ハウス内の換気に努め、多湿を防ぐ。
- (イ) 草勢の低下、窒素質肥料の過用は発病を助長するので適正な肥培管理に努める。
- (ウ) 老化葉はできるだけ除去し圃場内の通風を図る。伝染源を減少させるため多発葉を除去する。
- (エ) 栽培終了時期を勘案しながら定期防除に努め、葉液が葉裏までかかるよう丁寧に散布する。

(3) うどんこ病（冬春いちご）

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 4月中旬の調査では、葉での発生がやや多である。
- (イ) 気象予報では、降水量は並か多い、日照時間は少ないとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 発病葉や発病果は速やかに除去する。
- (イ) 薬剤散布に当たっては展着剤を必ず加用し、葉裏や芽の間隙部に葉液が付着するよう丁寧に散布する。
- (ウ) 同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション使用を心掛ける。
- (エ) 栽培終了時には、いちごの株元を切断し、ハウスを閉め切るなどしてハウス外への孢子飛散を防止する。特に、育苗床に近接するハウスでは注意する。

(4) 灰色かび病（冬春トマト、冬春きゅうり、冬春いちご）

ア 予報の内容 発生量：やや多～多

イ 予報の根拠

- (ア) 4月中旬の調査では、冬春トマト、冬春いちごでやや多、冬春きゅうりで多の発生である。
- (イ) 気象予報では、降水量は並か多い、日照時間は少ないとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) ハウス内の換気に努め、多湿を防ぐ。
- (イ) 過繁茂や軟弱な成育は発病を助長するので、適正な灌水や肥培管理に努める。
- (ウ) 発病果や枯死茎葉は早めに除去する。
- (エ) 発病初期の防除に努める。また、耐性菌の発生を防ぐため、同一系統の薬剤の連用は避け、ローテーション使用を心掛ける。

(5) ハダニ類（冬春いちご）

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 4月中旬の調査では、やや多の発生である。
- (イ) 気象予報では、気温は低いとされており、発生に抑制的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 葉裏を中心に観察し、発生がみられたら早めに防除する。また、同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション使用を心掛ける。
- (イ) 葉液が葉裏にかかるよう丁寧に散布する。
- (ウ) 薬剤散布に当たっては、ミツバチや天敵への影響を考慮して薬剤を選択する。

(6) アザミウマ類 (冬春いちご)

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 4月中旬の調査では、寄生花率はやや多、1花当たり寄生虫数は並である。

(イ) 気象予報では、気温は低い、降水量は並か多いとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 花や幼果の寄生状況を観察し、寄生が認められたら早めに防除を行う。

(イ) 薬剤散布に当たっては、ミツバチや天敵への影響を考慮して薬剤を選択する。

(7) ベと病 (たまねぎ)

(令和5年3月31日付け 令和4年度病害虫発生予察注意報(第3号)参照)

ア 予報の内容 発生量：多

イ 予報の根拠

(ア) 4月中旬の定点調査では、発生株率は20.8%と多の発生である。

(イ) 二次伝染株の増加が認められ、発生程度が高まっている圃場が認められる。

(ウ) 気象予報では、気温は低い、降水量は並か多いとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 球の肥大期になると感受性が高まり、葉身に淡黄緑色の楕円形の病斑が出始めるため、圃場観察を徹底し発病初期に治療効果のある薬剤で防除を行う。

(8) ミナミキイロアザミウマ (夏秋きゅうり、夏秋なす)

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

(ア) 4月中旬の調査では、冬春きゅうり (促成栽培) で多の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は低い、降水量は並か多いとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 定植まで露地で育苗する場合は、防虫ネットによるトンネル被覆を行い成虫の侵入を防ぐ。

(イ) 育苗期間中や定植時に、本虫に登録のある薬剤を処理する。

(ウ) 液剤散布では本虫に薬剤が直接かからないステージ (植物組織内の卵、土中の蛹) があるので、早期発見・早期防除に努め、発生を見たら3～7日間隔で2～3回防除する。

(エ) 同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション使用を心掛ける。

(オ) 本虫はメロン黄化えそウイルス (MYSV) を媒介するので注意する。

(9) ネギアザミウマ (たまねぎ)

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 4月中旬の調査では、1株当たりの成・幼虫数は5.36頭 (平年1.41頭) と発生密度が高くなっている。

(イ) 気象予報では、気温は低い、降水量は並か多いとされており、発生に抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 食害により葉が白くかすり状となり、多発時には葉全体が白化するのでこれらの症状がある圃場では直ちに防除する。なお、同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション使用を心掛ける。

(イ) 本虫はアイリスイエロースポットウイルス (IYSV) を媒介するので、発生密度が高まらないよう早めに防除する。

(ウ) 圃場内外の雑草は発生源となるので除草する。

(10) コナガ (アブラナ科野菜全般)

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

(ア) 予察灯、性フェロモントラップにおける誘殺数は、平年並である。

(イ) 気象予報では、気温は低く、降水量は並か多いとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 薬剤抵抗性の発達を回避するため、同一系統剤の連用を避けローテーション散布を心掛ける。

(イ) 老齢幼虫や蛹には薬剤の効果不十分のため、早期発見・早期防除に努める。

(ウ) 薬剤の効果の低下が疑われる場合には、別系統の剤を選択する。なお、フェニックス顆粒水和剤及びプレバゾンフロアブル5等のジアミド系薬剤は感受性の低下が認められており使用を控える。

(エ) 幼虫は主に葉裏に生息しているため、葉裏まで薬液が掛かるよう丁寧に散布する。

- (オ) 発生源となるアブラナ科野菜の収穫残渣は速やかにすき込み処分を行い、圃場周辺のアブラナ科雑草の除草に努める。

【病害虫発生予察情報】

愛媛県病害虫防除所ホームページでご覧になれます。

ホーム > 仕事・産業・観光 > 農業 > 鳥獣害・病害虫対策 > 愛媛県病害虫防除所

ホームページアドレスは <http://www.pref.ehime.jp/h35118/2406/byocyubojo/index.html>

【農薬使用時の注意】

- ◎農薬の選定にあたっては、農薬取締法に基づき登録された農薬から選定しましょう。
- ◎農作物の安全性を確保するため、農薬の使用にあたっては、適用作物、使用回数、使用時期、使用濃度、使用量、使用方法等の使用基準を遵守しましょう。
- ◎病害虫等の発生を的確に把握し、適時適切な経済防除に努め、農薬や労力等の低投入を図るとともに、低毒性農薬を使用しましょう。
- ◎農薬による防除のみに頼らず、耕種的防除法、物理的防除法及び天敵導入等を積極的に取り入れた総合防除を推進しましょう。
- ◎同一薬剤の連用は耐性菌、抵抗性害虫の出現や助長をまねくので、農薬のローテーション使用を心掛けましょう。
- ◎農薬の使用にあたっては、当該散布場所の地形、当日の気象、養蚕、養蜂、その他の環境条件を考慮し、周辺環境に影響の少ない薬剤を選定するとともに、危害の未然防止や環境の保全に努め、農薬事故防止対策を徹底しましょう。
- ◎農薬を使用する際、農薬のラベルに記載された登録内容、使用上の注意事項等を遵守し、農薬の散布にあたっては、農薬の種類に応じた保護具を必ず装着しましょう。
- ◎農薬の保管管理や取り扱いに注意し、紛失、盗難等の未然防止を図りましょう。